

## 2025年度第4回音環境運営委員会議事録

記録：岡本則子（幹事）

日時：2026年1月27日（火）17:00～19:20

場所：建築会館会議室

出席者：川井敬二（主査）、岡本則子（幹事）、山内崇（幹事）、池上雅之、上野佳奈子、小柳慎一郎、坂本慎一、佐久間哲哉、竹林健一、田中学、富田隆太、中澤真司、濱田幸雄、平栗靖浩、森長誠、安田洋介（順不同、敬称略）

欠席者：エバンズ直子、古賀貴士、羽入敏樹（敬称略）

### 提出資料：

- 資料4-0 第3回音環境運営委員会議事録（案）
- 資料4-1 音環境運営委員会の構成に関する主査メモ
- 資料4-2 小委WG経緯
- 資料4-3 組織編成の検討「進め方」意見
- 資料4-4-1 音シンポジウム企画案（音環境規準検討小委員会）
- 資料4-4-2 2026年度AIJ大会OS案（音環境規準検討小委員会）

### 1) 前回議事録の確認

- ・ 原案通り承認された。（資料4-0）

### 2) 審議・報告事項

- ・（審議）音環境規準検討小委員会：音シンポジウム企画案について（資料4-4-1）
  - 資料に基づき、第86回音シンポジウム案「より良い音環境の実現に向けた建築音響AIJESの活用～建築音響AIJESの概要と設計実務者による事例紹介～」に関する説明が行われた。建築会館ホールに空きのある6/29（月）、6/30（火）、7/1（水）のいずれかの日程で実施する。既刊AIJESの概要紹介3題、設計実務者・音響実務者による事例紹介3題、現在作成中のAIJESの概要紹介3題で構成する予定。
  - オフィス音環境AIJES検討WGに関する講演者を上野先生から辻村先生に変更する。
  - タイトルに重複する表現が認められるため、「建築音響AIJES」を「AIJES」にするなどの検討が必要。
  - 資料4-4-1の内容を実際のプログラムの形にした後、メール審議し、3/11の環境工学本委員会に諮る。
- ・（報告）音環境規準検討小委員会：2026年度AIJ大会OS案について（資料4-4-2）
  - 資料に基づき、セッション名「音環境分野の規基準の現在位置と将来展望」に関する説明が行われた。6件の発表が内定している。意見があれば、2月上旬までに連絡する。

### 3) 音環境運営委員会の構成と今後の方向性

- ・ 川井主査より、資料4-1および資料4-2に基づき、小委員会・WGの設置の経緯を含めた音環境運営委員会の構成に関する説明が行われた。
- ・ 小委員会の組織編成について、各委員より資料4-2および資料4-3に基づく説明が行われた。意見・コメントは以下の通り。
  - 現状を可視化して課題整理をすること、成果の明確化（有期限での具体的な取組の明示）が重要。常設というより、有期限で成果を出すような小委員会の設置が望ましい（例：2005年より前の体制）。
  - 現在は大会の細分類・細細分類にある「遮音」や「騒音」に関する小委員会はないが、外周壁を介した室内の静ひつ性は室内の規準を検討することに関係するので、運営委員会内で受け皿があるのも良い。一方で、新しいAIJESの検討の一部を騒音制御工学会の分科会に依頼している例もある。明確な課題がある場合、騒音制御工学会の分科会と連携し、新しい小委員会を設置することも方法として考えられる。
  - 基盤技術としての数値解析と測定法、音響現象の対象としての室内音響、固体音、遮音、これらとは異なる次元の分野横断的な規準検討、運営委員会直轄のWGといった、様々な位置付けの組織で運営委員会が構成されるのが望ましく、短期間での小委員会の改編には反対。

- 数値解析小委は、基盤技術としての位置付けの下、様々な分野にコミットしながら活動を行う方針。
  - 測定法小委は長期にわたる活動を行っているが、現在の課題が解決しても、例えば遮音性能の測定におけるフランキングの問題などの要素的な課題はあるため、今後も活動を継続活動する予定。
  - 測定法の対象範囲は幅広いが、測定法小委が全ての測定を請け負うのではなく、測定法に関する課題の意見交換の場を設けて、各小委と調整・連携して進めることが望ましい。
  - 室内音響小委は、その時々課題に対してアウトプットしてきたが、4年での課題解決は難しく、現状の体制を変える必要性を感じていない。
  - 固体音小委では、課題に対して長期スパンで対応してきた経緯があり、4年で区切るよりは継続的に行う方が進めやすいとの意見が多かった。また、固体音という学問体系を継続していくことが大切で、今後特徴として振動の伝搬・放射を取り扱うことなどを議論している。床衝撃音に対する課題が多いことから、床衝撃音とそれ以外の固体音の2本立てで、バランスよく考えていきたい。課題については、WGを立ち上げ、2年、4年といった期間で対応していく予定。
  - 騒音制御工学の床衝撃音分科会と固体音小委の関係について、現状としては連携はあまりしていない。床衝撃音分科会はデータを持ち寄り議論する形で研究発表会に向けた情報交換の場となっているのに対し、固体音小委は主に規準等に向けた議論を行っている印象。
  - 少数体制の環境振動運営委員会では、要素が1つのため、技術を適用する流れで小委（評価、予測、設計、測定）が分かれている。現在は小委の連携をテーマにあげ、年1回のシンポジウムの実施を目標として活動している。
  - 規準検討小委は、分野横断型の位置付けで、運営委員会との連携を密にしながら、その実働部隊としてAIJESを策定・整備していることが活動の特徴。長いスパンの流れ（整備するAIJESの議論→枠組みの作成→WGでの議論→刊行小委に格上げして刊行→5年毎の定期的な見直し）がある中で、関係する小委等の主査に委員として加わってもらい、ノウハウや注意点を継承している。性質上、委員が固定的になってしまうが、3年前に4割の委員の入れ替えはしている。現在、刊行に向けたAIJESがあるため、今後約5年は現在の形を維持して活動を行う予定。
  - 集住遮音小委では、新しい室内の静ひつ性の評価も含めて、集合住宅に関するAIJESが具体的になっている段階にあり、一区切りつけるといった意見もあがっている。一方で、これまでの意見を踏まえると、建築音響における遮音の位置付けは重要で、負荷をかけない組織づくりなどの対応を図り、活動の継続を検討したい。
  - 室内の静ひつ性は重要なトピックであり、これに取り組む小委員会があつてよい。集住に限らず、オフィスなども他の対象も含められるし、規準を検討する上では、床衝撃音における生活実感のように音環境の心理的な側面ともリンクすべきで、多様な委員による構成が望まれる。
  - 企画・広報WGによるアンケートで、委員の掛け持ちや人手不足、若手の参画が少ないなどの課題が挙がっており、委員の構成に関する視点も検討されるべきである。
- ・以上を踏まえ、小委員会の組織編成の総括として、川井主査より以下の内容が確認された。
    - 小委員会の名称等は以前は4年ごとに変えるのが慣例だったが、いまは同じものを続けてもよい。常置的な小委員会があつてもよい。
    - 名称が固定的で常置的な小委員会でも、中短期のミッション、重点的な取り組みについて、傘下にWGを設置する形で取り組みを明示することができる（明示が推奨される）。
    - 環境騒音分野は騒音制御工学会の分科会組織をベースとしているが、遮音性評価等で共同で取り組むことも可能。
    - 集住遮音小委は現在AIJES刊行の流れができてミッションを終了したと考えられるため、現設置期間にて廃止する。室内の静ひつ性は重要なトピックであり、これに取り組む今後の活動を検討する。
    - 来期や今後に向けて、取り組むべき新たな課題があれば、まずはWGを結成して活動を開始し、必要があれば小委員会に格上げするやり方で組織構成の更新を図る。
    - 若手の参画や世代交代については別の課題として今後あらためて議論する。
  - ・川井主査より、直属WGに関して資料4-1に基づく説明と意見聴取が行われた。意見・コメントは以下の通り。
    - 分野横断型の課題を対象とする場合に設置されるもの。
    - ミッションを明確にする。組織ありきの活動になっている場合は、無理して継続する必要はない。

- ・次年度は、環境工学本委員会が行われる7月、9月、11月、3月に加え、5月ぐらいに対面の委員会を行い、小委の廃止および新たな小委・WGの発足について協議する。新たな小委・WGについては、5月までに方向性等の案を提示し、9月の運営委員会で最終的な確認をする。発足することになれば、10月までに委員の構成等の詳細を決めて書類を提出する。

#### 4) 今後の開催予定

第5回 3/13 (金) 17:00~19:00

以上